

模試を活用した3年2学期後半以降の指導

模試情報から生徒の学習計画立案 受験校決定を支援

模試は大事な教材の一つである。しかし、生徒は偏差値や合格可能性判定だけに目を奪われて、大切な情報が詰まった模試結果を十分に活用していない場合がある。特に3年2学期以降、模試データを十分活用した進路指導を行うにはどんな点に注意すればよいのだろうか。模試結果モデルをケーススタディとして取り上げながら、受験校選びを中心とした指導を考える。

模試は学習の到達度や弱点分野を確認し、その後の勉強に生かすことが本来の活用のしかたである。ところが、生徒はともすると偏差値や合格可能性

判定だけに目がいきやすい。受験を間近に控えた2学期後半以降は、特にその傾向が強まる。生徒には模試の本来の目的を説明し、模試の結果を自分でしっかりと分析して、今後学習面でなにすべきかを引き出すように指導したい。

それには模試の個人成績票の見方を教えて、単にできた、できなかったのレベルで済ませるのではなく、問題と自分の答案、解答・解説をつぎ合わせて間違えた場合はどこがどのようにできなかったのかを分析させる必要がある。記述模試の場合は自分の答案もいっしょに戻ってくるのでつき合わせしや

すが、マーク模試の場合は答案が戻ってこないのが、この過程をおろそかにする生徒が出やすい。個人成績票と問題を照らし合わせ、どこを間違えたのか、それはマークミスなのか、時間切れでできなかったのか、本当にできなかったのかを分析させたい。今後の対策を考えさせ、アドバイスする。

この作業を通して、自分が理解できているところと、できていないところを見極めたうえで、その後の学習計画を修正するように指導したい。また、ある科目の中には「できていなくても心配のない分野」がある。例えば、自分の志望校の出題範囲に含まれない分

野や、まだ勉強を終えていない分野だ。これらを生徒自身が見極めて初めて模試の結果を正確に評価できたといえる。偏差値や合格可能性判定については絶対視しないことが必要だが、生徒は出てきた数字に過剰に反応しやすいので、模試の度に繰り返しいい聞かせた方がよいだろう。

生徒自身に成績推移表を作らせる

模試の成績は、3年生の分からも、時系列の推移表を生徒自身に作らせる

とよい。総合成績だけでなく、少なくとも国語、数学、英語の3教科についても推移表を作らせたい。そうやって自分の手を動かして学習結果をたどることで、自分の成績動向を知り、弱点を発見して解決に向けて努力する契機になる。

模試の度に生徒全員に対して面談をするのは時間的に難しいだろうが、成績が下降気味だったり、成績に神経質になっている生徒については、ちょっとした時間を取ってアドバイスしてやれば生徒の不安解消につながる。その際、志望校の可否結果の度数分布表などを見せて、「実際の合格ゾーンは幅広いので、DやE判定でも合格の可能性がある」と励ますのもよいだろう。また、返却された答案を分析し、この部分のケアレスミスがなければ何点増えた、あと一歩だった問題ができていれば何点増えたなど、「伸びしろ」を示してやり自信を持たせる方法もある。

生徒の成績特性を見極めアドバイスする

11月から12月にかけて受験校決定のための面談があるが、その際、模試の成績（特に3年生の成績）が判断材料

の一つになる。生徒には前述の成績推移表を用意させ、担任の側は手元に合格者・不合格者の偏差値の度数分布表、大学別入試科目一覧、大学難易ランキング表などを用意しておきたい。生徒の模試の成績を見るときは、偏差値や判定だけでなく、志望校のセンター試験と個別試験の配点比率、入試でキーになる教科に対するその生徒の特性に注意を払うようにする。

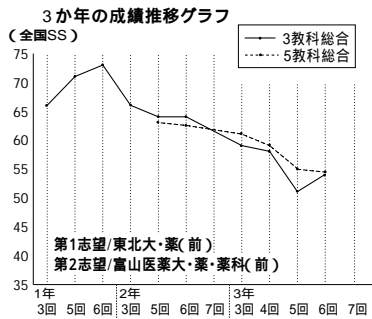
また、模試の成績は国語、数学、英語を中心に見るようにする。総合得点がよかった場合でも、この3教科がよかったためか、あるいは理科、地歴公民がよかったためか、意味合いはかなり異なってくる。理科、地歴公民は比較的短期間で得点を上げることが可能なため、国語、数学、英語の結果はあまりよくなかったが、理科、地歴公民のおかげで総合得点がよかったという場合は、その後ほかの受験生に追い上げられる可能性がある。逆に国語、数学、英語はよかったのに総合得点が伸びなかった場合は、それほど心配はいらぬ。勉強時間を理科、地歴公民にかけていけば解決する可能性が高い。記述式になると模試の成績が下がるような生徒に対しては、答案の書き方を身につけているかどうかを確かめる必要がある。いずれにせよ、生徒の成

績特性を見極めて、受験校決定について適切なアドバイスをしてやりたい。また、保護者の理解を得ておくことの必要性は進路指導全般にいえるが、模試についても同様だ。保護者は生徒以上に、偏差値や判定をつのみにする傾向がある。ときには生徒が結論を出す前に「この成績では、大は無理だ」

と決めつけてしまつこともある。保護者などを利用して、合格、不合格のラインは絶対的なものではなく、今後の努力次第で志望校に合格できることを理解してもらつようにする。資料として可否結果の度数分布表を保護者に渡して見てもらつのも一つの方法だろう。

次ページからのケーススタディの見方

- ・本文は進研模試による入試結果調査に基づいたものです。
- ・本文中の各大学の入試科目・配点は11年度入試のものです。
- ・本文中の「合格者平均偏差値」は、進研模試3年生第4回と第6回の集計結果に基づく合格者の平均偏差値です。
- ・表中の模試の形態、実施時期は次のとおりです。
 - 3年生第3回...マーク/6月上旬
 - 3年生第4回...記述/7月中旬
 - 3年生第5回...マーク/10月上旬(駿台予備学校共催)
 - 3年生第6回...記述/10月下旬(駿台予備学校共催)



3年間の成績推移を3教科(国語、数学、英語)総合、5教科総合の2種類で表しています。

	国語	数学	英語	地歴公民	理科
3回	国 51.8	数学1 59.9	英 59.6	地理B 59.9	物理Y 57.6 化学Y 72.1
4回	国語X 57.3	数学2 47.3	英 65.3	地理B 57.9	物理Z 50.1 化学Z 64.2
5回	国 46.6	数学1 60.9	英 52.1	地理B 58.8	物理Y 51.4 化学Y 67.1
6回	国語X 54.8	数学2 47.9	英 63.5	地理B 48.1	物理Z 51.3 化学Z 49.3

各教科・科目別に3年模試の偏差値を掲載しています。教科・科目名のあとについた記号は、出題内容の違いを示しています。

国語 X...漢文まで含む問題
数学 X...・Bまでの問題
数学 Z...・Cまで含む問題
理科の各科目 Y... A、Bまでの問題
理科の各科目 Z... まで含む問題

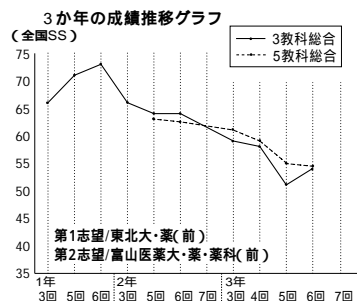
模試データを基にした指導 ケース1

併願校の選択肢を広げさせる

低学年のときに成績のよかった生徒は「自分は本当はできる」という思いがある。プライドを大切にしたりやりにから、一方で現実も見つめさせたい。

この生徒は数学は第3、5回、つまりマーク式はある程度取れているが、第4、6回の記述式がよくない。第4、6回の数学Zは数 が含まれるから数 ができていないと推測できる。東北大薬学部前期の個別試験の配点は1000点のうち数学が400点とかなり高く、この点も不利な材料だ。薬学部志望ならどこまで数学を伸ばせるかがキーになる。一方で、数学の配点比率が低い大学を探すのも、一つの方法だ。

化学が第6回で急に落ちてくる。第6回には有機の分野が加わって、そこができなかったためとも考えられる。この生徒は有機の学習を十分にやっていたいなかった可能性もある。その場合成績低下はあまり心配いらない。理科の学習



3年模試の科目別偏差値推移表

科目	3回	4回	5回	6回
国語	51.8	57.3	46.6	54.8
数学	59.9	47.3	60.9	47.9
英語	58.4	58.4	52.1	47.9
地歴公民	59.9	57.9	48.2	48.1
理科	57.6	50.1	51.4	51.3

の遅れは残りの期間で十分挽回可能だ。現状の成績では国公立大の薬学部は難しい。現役合格にこだわらるかどうかを確認して、もしそうなら第1志望をまだ可能性の高い富山医大にして、第2志望は薬学部以外の学部で、化学、保健衛生学などに選択肢を広げる方法もある。どうしても薬学部に行きたいのであれば、学費面を考慮しながら私立大も視野に入れた方がよい。浪人の可能性も考えたうえで、悔いが残らないように受験校を決定させてやりたい。

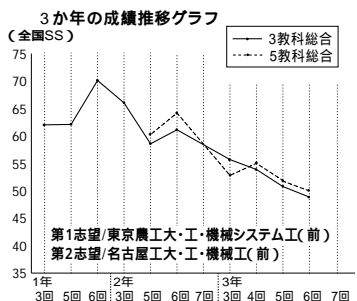
模試データを基にした指導 ケース3

傾斜配点に着目した指導を

成績は全体的には下降気味だが、数学と物理がよく、理系で英語も不得意ではないという点を強みとして生かしたい。第1志望の東京農工大工学部機械システム工学科は、センター試験800点、個別試験は1000点満点のうち数学と理科が400点ずつ。個別試験重視でさらに得意科目が高配点のこの傾斜配点を有利な材料にしたい。

ただ、第6回の模試で物理が急に落ちたのが気にかかる。原因をしっかりと調べ、対策を立てる必要があるだろう。センター試験ではやはり文系科目がネック。特に国語の成績がいま一つ。理系の生徒の古典嫌いはしばしば見かけられ、この生徒も古典が苦手な可能性が高い。残念ながら、短期間で国語の成績が劇的に伸びることはあまり期待できないが、このような生徒に対しては、センター試験問題集を冬休み中に一度解いてみるように指導するのもよいだろう。

あるいは3教科入試で国語がない電気通信大の前期日



3年模試の科目別偏差値推移表

科目	3回	4回	5回	6回
国語	42.1	45.8	34.4	44.5
数学	58.6	55.4	61.7	56.2
英語	71.7	63.0	63.1	51.0
地歴公民	55.5	51.6	56.7	45.6
理科	61.3	61.5	65.1	53.9

程、もしくは少しでも国語の配点の低い大学を視野に入れるのも一つの方法だ。東京農工大と電気通信大の両方の願書を用意しておいて、センター試験で国語の点数が取れたら、東京農工大を受け、思うように取れなかったら電気通信大を受けるといったアドバイスも有効だ。

たとえ国公立大が不合格の場合も、この生徒は数学、理科、英語の成績がよいので、3教科型の私立大に期待することができるといえるだろう。いずれにせよ、傾斜配点に着目した進学指導を心がけたい。

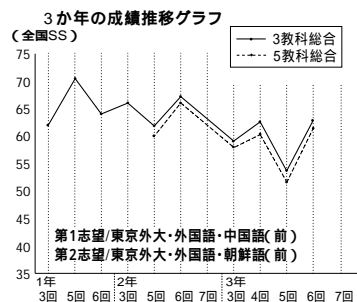
模試データを基にした指導 ケース2

志望校に合わせた勉強法をとらせる

マーク式の第5回で大きく落ち込んでいる。記述式で結果を出しているのあまり心配はないが、低下の原因をはっきりさせ、対策を立てるようにさせる。この生徒は推移グラフから偏差値62、63程度の力は持っている判断できる。総合的に見て、第1志望の中国語学科はもう一息で合格、第2志望の朝鮮語学科は合格圏に入っている。

英語は平均すると偏差値65以上で、東京外大を志望するだけの力は十分とはいえないまでも持っている。東京外大前期の個別試験は英語のみなので、過去問を分析し、十分な対策を立てさせたい。第5回の模試が悪かったからと落ち込まないように、「キー教科の英語ができるのだから」と励まして自信を持たせたい。

数学はあまりよくはないが、東京外大のセンター試験の数字は600点満点中100点なのでそんなに心配はいらない。地歴公民は比較的短



3年模試の科目別偏差値推移表

科目	3回	4回	5回	6回
国語	59.3	66.8	52.3	56.4
数学	50.7	54.8	51.1	59.3
英語	45.1	54.8	44.8	59.3
地歴公民	70.7	63.8	60.4	66.7
理科	55.6	60.6	47.6	55.9

期間で力がつく教科なので、世界史はまだ伸びる余地がある。

東京外大は入試では理科は不要だが、この生徒は模試で生物を受けている。併願校のためだろうが、果たして理科対策にどれくらいの時間をかけているのだろうか。併願校は理科を必要としないところから選ぶことはできないのか、また、どうしても理科対策が必要なら、効率的な勉強法ができていないか、確認してみる必要があるだろう。受験校の入試の配点を常に念頭に置いた勉強法をとらせたい。

模試データを基にした指導 ケース4

大学の出口情報を伝え期待感を高める

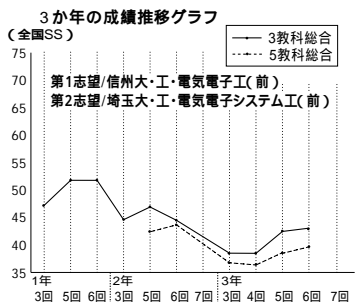
この生徒は成績が伸び悩んでいたが、それでも3年生になって上昇傾向にあり、特に夏休み以降に伸びが見られる。「3年生になってがんばったね」と励ましてやりたい。10年度入試の結果から、合格者、不合格者の偏差値の度数分布表を見てみると、第1志望の信州大工学部電気電子工学科の合格者平均偏差値は51程度で、45くらいから合格者が

両方を視野に入れ、センター試験の得点が期待したほど取れなかった場合に山形大という方法もある。

増えている。この生徒は理系の3教科の偏差値では41程度まで追い上げており、可能性はある。信州大工学部の場合、前期の配点比率はセンター試験800点、個別試験200点なので、センター試験が合否の力を握ることを理解させ、対策を立てさせる。

第2志望は埼玉大だが専業人員が少なく現状では難しいと考えられるので、合格者平均偏差値46程度の山形大工学部電子情報工学科などの選択肢も考えられる。山形大の場合、個別試験が数学400点、理科300点なので、数学の力がついてきたことが生きてくる。信州大と山形大の

工学部や経済学部などは多くの大学に設置されているので、地域にこだわらなければ比較的指導はしやすい。ただし、生徒が最初に選んだ大学以外のところを勧めるときは、その大学の出口情報(就職先の傾向、大学院進学率など)や学部の特徴をきちんと伝え、理解させる必要がある。そうでないと偏差値だけで大学を選んでしまうことにもなりかねない。判断材料を与え、自分に合った大学だと生徒に確信させて満足度を高めてやるのが大切だ。



3年模試の科目別偏差値推移表

科目	3回	4回	5回	6回
国語	44.0	46.2	47.9	48.8
数学	35.7	36.2	46.2	49.9
英語	43.9	43.8	44.4	41.6
地歴公民	42.5	39.3	40.4	41.4
理科	55.5	42.0	41.4	38.4